

# 山と博物館

第25巻 第3号

1980年 3月25日

大町山岳博物館



観鬼岳 撮影 飯沢敏一

動物は人間の従属物でない

「お役人さんってひどい。口先で動物愛護というが、実際はそんな気持はみじんもない。その時々のご都合主義で、天然記念物ともてはやしながら、すこし増えると有害動物だと騒ぎだてるのだから。」

「新聞記者だつてわかつていないのよ。鳥籠に幽閉されている小鳥やオリに閉じ込めた動物と子供たちとの交流物語を、動物を愛する美談にしたてあげるんだから。ゆるせない危険な思想ね。」

野生動物の環境は極めて劣悪である。動物たちのそんな抗議の声が、あちこちから聞えてきそうな昨今である。人間優位の判断、つまり、有益か、無益か、有害か、無害かという身勝手な判断で、動物が捕えられたり、殺したりされている。そんな権利が許されるのであるうか。

兵庫県下に生息地を持っていたコウノトリは、いま絶滅した。最大級の悲しみを感じ、二度とよみ返らないあの姿に、人々は愛惜の情を示している。だが、コウノトリは、江戸時代からの受難の歴史がある。田畑を荒らす害鳥として農民に嫌われ、代官に陳情し、大量殺りくがくりかえされてきた。田畑を守ることも大切にできないが、殺すことで解決しようとした「未開」な考えが問題だ。

日本だけに限らない。東南アジアでも起っている。スマトラサイの角は、性不能の治療や陣痛の痛み止めに効くといつて、どんどん殺された。べつこうの原材料となる海がめの一種、タイマイは、東南アジアで激減している。日本人業者の要求によって乱獲されたのが主な原因と、IUCN(国際自然保護連合)のメンバー、内田至博士は報告している。

人間のそうした「驕りの論理」は許せない。「鳥がまた帰ってくると、ああ春がきたな」と思う。でも朝早く起きて、鳥の鳴き声がない。それでいて、春だけがやってくる。あまりに有名なレイチェル・カーソン女史の「沈黙の春」の一節だ。そうした状況に、なつてほしくないと思うのだが。

# 白沢天狗山の哺乳動物

土岐 惣亮

北アルプス後立山連峰の爺ヶ岳(標高二六七〇m)より東南に派生している尾根(白沢天狗尾根)のほずれに標高二〇三六mの白沢天狗山がある。白沢天狗山東側斜面一帯は大町山岳博物館を中心とした研究グループにより、ニホンカモシカの生活史に関する調査が一九七六年度から一九七八年度までの三ヶ年行なわれた地域である。今日まで白沢天狗山周辺の哺乳動物については、「山と博物館」第二十二巻第一号に山口佳秀氏により東側山麓のスキー場(爺ヶ岳スキー場)内で採集されたアルピノのジネズミについての報告がある。

著者はニホンカモシカの生活史の調査に参加し、その際、この地域に棲息するいくつかの哺乳動物に関する知見を得ることができた。ここに白沢天狗山の哺乳動物としてその知見を報告する。

白沢天狗山は標高一五〇〇m—一五五〇mを境にして上部が国有林、下部は民有林となっている。地形は複雑に入り組んだ侵蝕谷により急峻な地形が大部分を占めているが、山麓近くでは比較的ゆるやかな地形となっている。ニホンカモシカの調査地域となった東側斜面の植生は、国有林では人為的な影響をほとんど受けていないブナを主体とした落葉広葉樹林で、白沢天狗尾根上と侵蝕谷



小熊山(1302.6m)より望む白沢天狗山  
撮影 古幡和敏氏

によって形成される尾根上にはクロベ・コマツガ等の針葉樹が見られる。民有林は古くから薪炭林や緑肥としての刈敷きの採集地として利用されていたが、ここ三十年近くはほとんど手が加えられていないミズナラ・コナラ等を主体とした落葉広葉樹林となっている。これらの国有林と民有林の林界附近にクロベ林がベルト状に分布している。

このような環境のなかで棲息している哺乳動物は六目十科十四種が確認された。これらの哺乳動物のうち、一般に小哺乳類と呼ばれる食虫類・ネズミ類はワナかけによる採集の結果であり、その他の哺乳動物は、ニホンカモシカの調査時に直接観察と生活痕跡(糞・足跡等)により確認したものである。

以下それら種ごとに特徴や生態的

なことにについて簡単に述べる。

ヒメヒミズ(食虫目モグラ科)

*Dymecodon pilirostris* True

本種は日本特産種で、かつ最も原始的な形態をもつモグラ科最小の動物である。主に亜高山から高山帯に広く分布棲息し、採集も容易である。食物として主に土壤動物や昆虫類を捕食する。白沢天狗山では、白沢天狗尾根上標高一八九〇m地点のクロベ・コマツガ林内より採集された。この種は比較的林内が暗く、土壌湿度が多少高いような所にも見られる。

ニホンザル(霊長目オナガザル科)

*Macaca fuscata* BLYTH

日本に棲息する本種は世界のサル類の分布における最も北に棲息する種である(最北限地は青森県下北半島)。白沢天狗山では春から秋にかけては、西側の白沢・竜川流域に生活しているようで、東側斜面には十月初旬頃より五月中旬頃まで白沢天狗稜線を越えて出現するようである。時には山麓の源汲・上手の集落近くまで出現し、スキー場内でも見ることができ、主に群を形成して生活しており、白沢天狗山の場合是一群十五〜二十頭である。カモシカ調査時に移動中の群にぶつかり、群に囲まれた時は、恐しく異様な感じを受けた。

トウホクノウサギ(齧歯目ウサギ科)

*Lepus brachyurus angustidens*

HOLLISTER

日本に棲息するノウサギ(*L. brachyurus*)は、四亜種が知られているが、これらの分類・分布(特にトウホクノウサギとキウウシノウサギ)は、今だ不明瞭な所が多く、当地方のノウサギについても今後の調査研究が必要と思われる。本報では通説に従い、トウ



枝から枝へ飛翔するリス 1977年3月撮影

ホクノウサギとした。本亜種は冬期は白化するのが普通の様であるが、白化しない茶色型もある。大町市周辺にはその個体が多いことが知られ、白沢天狗山でも時おり見ることができ、積雪期には非常に目立つ。ノウサギは、低地から高山帯にかけて広く分布し、草本類や樹木のやわらかい部分を主に食べているが、所によっては造林木や農作物に害を与えることもある。白沢天狗山に棲息する哺乳動物中、最も多く見られ東側斜面全域に分布棲息している。

リス(齧歯目リス科)

*Sciurus lvs* TEMMINCK

あまり人を恐れず、多くの人々から親しまれている本種は、白沢天狗山においても調査時にはひとときの安らぎを与えてくれた。人里近い山麓から亜高山帯までの森林に多く、ミズナラ・クリ等の種実や昆虫・キノコ等を採食する。白沢天狗山では、ミズナラやクリ

の多い中復から山麓にかけての落葉樹林内に多く見られる。

ヤブネ(齧歯目ヤブネ科)

*Glirulus japonicus* SCHINZ

ヒメヒミズ同様に日本特産種で、かつ天然記念物に指定されている。本州中部では落葉広葉樹林から亜高山帯の針葉樹林に棲息し、キツツキ類があけた穴や樹洞、時には巣箱を利用して生活している。白沢天狗山での直接観察例は標高二四〇m附近で、冬眠を始めようとしていた一匹を見ただけである。冬眠中は身体を丸めて、尾を頭の上のせ身体をまきこんでいる。摂氏十四度前後まで暖めない限り活動せず、ふれたり転がしてまた眠りこけている。

アカネズミ(齧歯目ネズミ科)

*Apodemus speciosus* TEMMINCK

本種は、ネズミとしては中形の毛色がオレンジ色を帯びた美しい種である。日本各地の耕地周辺や低山帯の疎林に多く分布し、暗い森林や亜高山帯以上には少ない。白沢天狗山では、山麓の爺ヶ岳スキー場第三リフト終点上部(標高一二四〇m)地点より採集された。食物は主に植物質の物や昆虫等食べている。

ヒメネズミ(齧歯目ネズミ科)

*Apodemus argenteus* TEMMINCK

ヒメヒミズやヤマネと同様に本種も日本特産の種類である。前種アカネズミよりさらに小さく毛色は栗茶色に近く金色の光沢がある。愛らしいネズミである。一時期学名を芸者(*Apodemus geisha*)と呼ばれたことがあった。その分布域は広く日本各地の低山帯から高山帯までの森林に多く見られる。白沢天狗山ではアカネズミと同一地点と白沢天狗尾根(標高一八九〇m)から採集されている。山の中で腰をおろしている時々姿を見ることができ、落葉期には林内でカサコソと採餌する小さな音を聞くことができる。食物はアカネズミとほぼ同じである。

ツキノワグマ(食肉目クマ科)

*Selenarctos thibetanus* G. CUVIER

本州に棲息する陸産哺乳動物中最大の本種がある(但し、月の輪は変異が極めて著しく消失している個体もある)。主に、低山帯から亜高山帯にかけての落葉広葉樹林を生活の場所として、アリ・ハチ等の昆虫類やミズナラ・クリ・ヤマブドウ等の果実を採餌する。秋にはミズナラ等の実を樹上で食べた跡「クマダナ」が見られる。白沢天狗山では各所にこの「クマダナ」やナワバリの印である「クマハギ」が見られ、時には山麓の爺ヶ岳スキー場を横断することもある(一九七六年十一月)。

タヌキ(食肉目イタチ科)

*Nyctereutes procyonoides* GRAY

イタチ科動物でありながらその外観は太く短いずんぐりむっくりとした体をしている。形態学的にも最も原始的とされている。昔より人々に親しまれ民話にも多く登場する本種は、比較的人里に近い広葉樹林帯に生活の場をもっている。自分では穴が掘ることはできず、自然にできた岩穴や樹洞を巣とし、糞は一ヶ所排出しタメ糞を作る。地方によっては、ムジナ・マミとも呼ばれ、アナグマ(イタチ科の動物 *Melus melos*)と混同されていることも多い。雑食性。白沢天狗山においては標高一二五〇m前後より以下に多く見られ、山麓の集落周辺にもよく見られる。山中で時おり見かける本種が、丸いお尻を左右にふり逃げて去る後姿はなんとも言いがたいユーモラスなことである。

キツネ(食肉目イタチ科)

*Vulpes vulpes* LINNAEUS

タヌキと同様に昔からよく民話等に登場するがその評判はよくない。しかし、自然界では造林木や農作物を荒すノウサギ・ノネズミ類の天敵として重要な位置を占めている。生活の場は、広範囲にわたり集落周辺の低山帯から亜高山帯の林縁部に多く、高山帯にも棲

息する。雑食性が強く、観光地や山小屋周辺の個体の糞には、人工物(輪ゴム・銀紙・ビール片等)が含まれることがままある。

テン(食肉目イタチ科)

*Martes melampus* WAGNER

後述するイタチに類似するが本種のほうがずっと大きい。低山帯から亜高山帯、夏には高山帯まで広く分布しその行動域は大きい。猟師達の話では、キツネはワラジ八足・テンは十足をもつて追いきれないと言われている。基本的な食物はキツネ同様にノウサギ・ノネズミであるが、秋にはアケビ・サルナシ等の果実も多く食べる。本種には冬に鮮やかな黄色に変化するもの(キテン)と、栗色に近い色を示すもの(スステン)との二色相が見られる。白沢天狗山の個体は、夏から秋にかけての時期に直接観察したものである由に、どちらであるか明確ではない。

イタチ(食肉目イタチ科)

*Mustela sibirica* PALLAS

肛門腺より出す独特な臭いの「イタチの最後っぺ」で知られる本種は、小型の肉食獣である。山地帯から亜高山帯の沢沿を中心に棲息し、高山帯にまで上がることもある。魚・カエル・ノネズミ類を主として捕食する。時にはニワトリ等の飼っているものまで及ぶ。

オロジロ(食肉目イタチ科)

*Mustela erminea* LINNAEUS

登山者の間でよく知られ、親しまれている本種は、肉食獣の中で最も小さな部類に入る(最小種はイイズナ *Mustela erminea* で尾を含めても一八〇mm前後)。亜高山帯から高山帯にかけて棲息し、冬には尾の先を残して白化する。人をあまり恐れず、時おり登山者の靴を齧るなどの愛敬をふりまくかわいらしい動物である。身体が小さいのに(尾を含めて二三〇mm前後)、自分より大きいノウサギやノネズミ類を主食として鳥の卵なども捕食する。白沢天狗山の棲息箇所は一ヶ所だけである(標高一二四〇m)。

ニホンカモシカ(偶蹄目ウシ科)  
*Capreolus crispus* *crispus* TEMMINCK

特別天然記念物。低山帯から亜高山帯にかけて森林帯を中心に生活し、主としてやわらかい草本類や、広葉樹の葉を食べるが、冬には樹木の越冬芽や針葉樹の葉を食べる草食獣である。一定のなわばりを持ち、家族群(二〜四頭)で生活するのが普通である。平素の行動はゆつたりとし、採食・休息・反すうで一日の大部分を過ごす。昨今では、植林面積の拡大に伴って植林木に害をもたらすようになった地域もある。

白沢天狗山東側斜面一帯は、初めにも述べたが、本種の生活史に関する調査が行なわれた。その結果によると、この斜面の南北二七〇〇mの範囲に二家族六頭が棲息し、その行動域は山麓から白沢天狗尾根までとされている。これらのカモシカは山麓の集落やスキー場からも採食行動や移動中の個体を観察することができ。

以上、白沢天狗山に棲息する哺乳動物について報告してきたが、しかし、これらの動物は直接観察と明確な生活痕跡を残したものに限り限られた。したがって、この地には他の哺乳動物も棲息する可能性が多分にある。

例えば、アナグマ・モモンガ・ヤチネズミ等の齧歯類、モグラ・トガリネズミ等の食虫類、コウモリ類が挙げられる。今後再び調査の機会が得られた時には明らかにすると思える。最後に白沢天狗山周辺は、二次林が含まれながらも比較的自然環境が豊富に保たれ、人為的な影響が少ない。このような地域に棲息するこれらの哺乳動物が、これから先も安住できるよう著者は願う。

(東京農業大学動物学研究室)

